

～11月4日（日）リレー小説2日目～

あの日の空は、どうだったっけ……。

雨が降っていた気がする。

一日すごしやすい秋晴れになると言っていたニュースのお天気お姉さんの言葉を信じて傘の一つも持っていない自分に、ついてないなと肩をおとした。

寒くて仕方ないのは、天気の子か気持ちの問題なのか。

こういう時はコーヒーでも飲んで落ち着くのがオシャレさんなのだろうと思って近くのカフェに入ったが実を言うとコーヒーは得意ではない。何を頼もう。

「ホットミルクでも頼んでみるか。」

僕は一人つぶやいた。

「ホットミルク……ですか。」

声のした方を見ると、艶のある長い黒髪の仲間由紀恵似の美女が足を組んで座り、頬杖をついてこちらを見て微笑んでいた。

カフェの風景となじむ美女に声をかけられ、僕はつい顔を赤らめる。自分がひどく場違いな気がして、少しだけはずかしい。

「ミルクを頼んじゃ、いけませんか？」

「ホットはありません。」

私はこの場において、疎外された存在なのであろう。この3人の空間において何か場を壊せるような一言を発する必要があるのだ。

「ホットいて下さい。」

こんな、オシャレな店内で、こんなことを言う人間、普通なら店員も関わろうとしないだろう。少しだけ、後悔しつつ、顔を上げて見ると、なんと美女は肩をふるわせて笑っていた。

「何わろてんねん。」

私は思わずそう声に出していた。心がひどく荒み、あのナイル川も凍る程の冷たい気を放っていた自信がある。

それでも美女は笑いつづけていた。

end